

神奈川 芸術プレス

vol.165

KANAGAWA ARTS PRESS

2024年(令和6年) 9月26日発行



特集

つくり、届け、つないできたもの

——神奈川県民ホールの50年

50年の歩み 大ホール「芸術のまちを育てたホール」丸山 孝(神奈川新聞社 元文化部長)

小ホール「オルガン・アドバイザーからのことば」中田恵子 **ギャラリー**「県民ホールギャラリー開館50年をふりかえる」藤嶋俊會

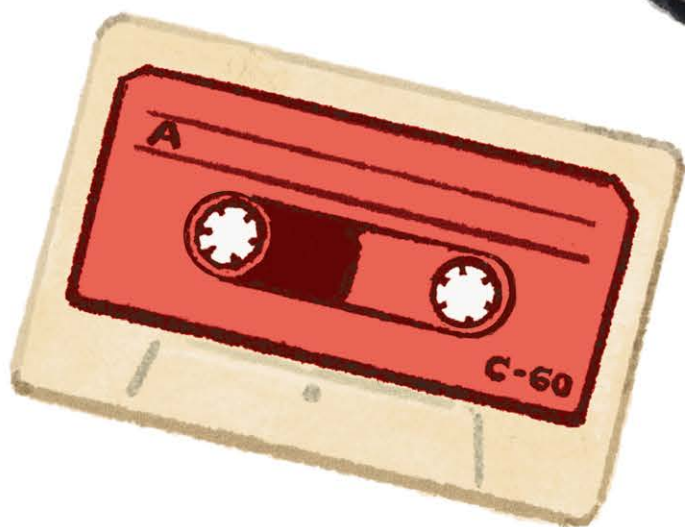
「カナケン」とポップミュージック インタビュー：栗原治久(ラジオDJ)

COLUMN 沼野雄司 **INTERVIEW** 平原慎太郎、やなぎみわ **MESSAGE** 50周年に寄せて

連載 アートシーンプレイバック、つなぐ——社会と芸術、公演の舞台裏



公益財団法人
神奈川芸術文化財団



04 特集 つくり、届け、つないできたもの ――神奈川県民ホールの50年

06 50年の歩み

08 大ホール

「芸術のまちを育てたホール」 丸山 孝(神奈川県新聞社 元文化部長)

10 小ホール

「オルガン・アドバイザーからのことば」 中田恵子(オルガニスト)

11 ギャラリー

「県民ホールギャラリー開館50年をふりかえる」 藤嶋俊會(元神奈川県民ホールギャラリー学芸員)

12 栗原久さんとふりかえる「カナケン」とポップミュージック

13 COLUMN

異界に挟まれた、宙づりのヴェニュー 沼野雄司(神奈川県民ホール・音楽堂 芸術参与)

14 INTERVIEW

平原慎太郎(ダンサー／振付家)

やなぎみわ(美術作家／舞台演出家)

16 MESSAGE

50周年に寄せて

19 連載
REGULAR FEATURE

20 アートシーンプレイバック

2024年上半期の美術プログラムをふりかえる

文：村田 真(美術ジャーナリスト)

22 つなぐ―社会と芸術

『世界のうたとあそぼう!』in「第22回あやせ国際フェスティバル」

23 公演の舞台裏

舞台監督編 竹井祐樹(舞台監督)

24 ご支援のお願い

神奈川県芸術プレス | 読者アンケート

(公財)神奈川県芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

(公財)神奈川県芸術文化財団について

1993年10月に設立された神奈川県芸術文化財団は、以下3つの県立文化施設の運営と、芸術文化の創造・普及に一体的に取り組んでいます。

神奈川県民ホール



神奈川県民ホール(以下、県民ホール)

1975年、全国屈指の大型文化施設として開館。大型の舞台機構を備える大ホール、オルガンが設置された小ホール、ギャラリー、会議室等を有する多目的ホールです。オペラ、バレエ、コンサートから各種大会・式典、美術作品の展示まで、多彩な催しが行われています。

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町3-1
TEL : 045-662-5901 (9:00~17:00)
<https://www.kanagawa-kenminhall.com/>

2024年度ラインアップはこちら

https://www.kanagawa-kenminhall.com/news_detail/2420

KAAT 神奈川県芸術劇場



KAAT 神奈川県芸術劇場(以下、KAAT)

2011年、モノをつくる(芸術の創造)、人をつくる(人材の育成)、まちをつくる(賑わいの創出)の「3つのつくる」をテーマとする創造型劇場として開館。最大約1200席のホールのほかに、大スタジオ(約220席)と、3つのスタジオを有します。

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL : 045-633-6500(10:00~18:00)
<https://www.kaat.jp/>

2024年度ラインアップはこちら

https://www.kaat.jp/news_detail/2413

木のホール

神奈川県立音楽堂



写真・青柳聡

神奈川県立音楽堂(以下、音楽堂)

1954年、公立施設としては日本で初めての本格的な音楽専用ホールとして開館。前川國男設計による戦後モダニズム建築の傑作として評価されています。ホールの壁面はすべて木でつくられ、その美しい響きで愛されています。2021年に神奈川県重要文化財に指定。

〒220-0044 神奈川県横浜西区紅葉ヶ丘9-2
TEL : 045-263-2567 (9:00~17:00 月曜休館)
<https://www.kanagawa-ongakudo.com/>

2024年度ラインアップはこちら

https://www.kanagawa-ongakudo.com/news_detail/2414



県民とともに歩み、

世代を超えて愛されてきた県民ホールが、

2025年3月末をもって休館します。



ジャンルも時代も、プロアマも問わず、

あらゆる芸術文化に触れられるこの場所で、

あなたはどんなシーンに出会いましたか？



また2011年からは、子どもも大人も気軽に劇場体験ができる「オーブンシアター」が毎年開催され、より多くの観客に開かれていきました。そんな多彩な芸術表現を育んできた県民ホールですが、老朽化により

1994年に神奈川県芸術文化財団による運営に移行してからは、新しいオペラの制作やコンテンポラリーダンスの招へい、ジャンルを越境した複合的な演出表現の追求など、新たな創造の場としても愛されてきました。



2025年に50周年を迎える県民ホールは、1975年1月17日、横浜港を望む山下公園通りに開館しました。充実した舞台機構を備える約2500席の大ホールと、公立ホール初のパイプオルガンをもち小ホール、吹き抜けが特徴的な展示室をはじめとした広大なギャラリーを擁する県民ホール。ホールでは国内外の舞踊や音楽、オペラなどの舞台芸術、そしてポップミュージックや子どもを対象とした公演などがあり、ギャラリーは現代作家の展示だけでなく、県民の発表の場としても幅広く親しまれています。

2025年3月31日をもって休館します。

今回の特集では、県内の文化芸術を長年見てきた神奈川新聞社 文化部長の丸山孝さんと県民ホール・現オルガン・アドバイザーの中田恵子さん、ギャラリーの初代学芸員である藤嶋俊會さんとともに、各会場の県民ホール主催プログラムを中心とした動きをふりかえります。

また、神奈川県のパップスシーンにおいても重要な場所だった県民ホールが、県民やアーティストにとってどのような存在だったのか、ラジオODJの栗原治久さんに語っていただきます。

「INTERVIEW」には、2019年にギャラリーで個展を開いた美術作家・舞台演出家のやなぎみわさんと、50周年記念オペラシリーズVol.1で演出を手がけたダンサー・振付家の平原慎太郎さんが登場。県民ホールでの制作や、今後の関心についてお話しいただきました。

さらに、県民ホールとゆかりの深いアーティストや団体の皆さまからメッセージをお寄せいただきました。プログラムの企画者、県内のメディア、アーティスト、地域団体など、複数の視点から、県民ホールがつないできた50年の歩みをお届けします。

施設内写真：青柳 聡
屋外写真：大野隆介

つないできたもの



特集

神奈川県民ホールの50年

つくり、届け、

50年の歩み

1975年に開館してからこれまで、多彩な舞台芸術を届けてきた県民ホール。1994年からは創作・発信にも力を入れてきました。また、ポップミュージックの関係者からも「カナケン」と親しまれ、著名アーティストによるコンサートも数多く開催されています。

ここでは、ほんの一部ですがホール主催プログラムとこれまでに登場したアーティストを中心に、県民ホールの50年をふりかえります。

ホール主催プログラム・大型公演



1975

1988
入場者 **1000** 万人突破



1985

1994
「神奈川芸術フェスティバル」開始
「コンテンポラリー・アーツ・シリーズ」開始
神奈川芸術文化財団が施設の管理運営を受託
團伊玖磨が初代芸術総監督に就任

1993
神奈川芸術文化財団設立

1990
小ホールのパイプオルガンを舞台正面に移設

1979
「神奈川吹奏楽フェスティバル」開始

1976
「神奈川芸術祭」開始

1975
開館「新しい文化への幕あけ」
「第10回神奈川県美術展」(以降毎年開催)

90's

80's

70's

カナケンのステージを彩った

アーティストたち

ASKA、小田和正、GLAY、
米米 CLUB、徳永英明、
PUFFY、藤井フミヤ、ゆず

小泉今日子、郷ひろみ、さだまさし、サザンオールスターズ、THE ALFEE、
高橋真梨子、TUBE、浜田省吾、松田聖子、矢沢永吉、山下達郎
オスカー・ピーターソン、ボブ・ジェームス

荒井由実、五木ひろし、井上陽水、
加山雄三、沢田研二、オフコース、
キャンディーズ、西城秀樹、野口五郎、
布施明、美空ひばり、八神純子、山本リンダ
オリビア・ニュートン=ジョン、カーペンターズ、
クインシー・ジョーンズ



招へい：日本舞台芸術振興会

1988



1987

招へい：日本舞台芸術振興会

1986



招へい：ジャパン・アーツ

1983

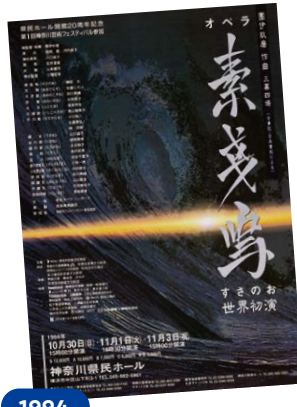
2015



2008



1994



2010



2000



2023

入場者 **3000** 万人突破

2004

入場者 **2000** 万人突破

2025

記念事業
『浜辺のインシュタイン』(2022年)
サルヴァトーレ・シャリーノ『ローエングリン』(2024年)

開館50周年

2023

「オルガン・プロムナード・コンサート」
第400回公演

2015

記念事業
一柳慧『水炎伝説』
黛敏郎『金閣寺』

開館40周年

2011

「オープンシアター」開始

2011
KAAT 神奈川芸術劇場
開館

2005

記念事業
現代彫刻の歩みⅣ
モノづくりの逆襲(2004年)
一柳慧『愛の白夜』(2006年)

開館30周年

2000

芸術総監督に一柳慧が就任
「神奈川芸術フェスティバル」を
「神奈川国際芸術フェスティバル」へ改名

1995

記念事業
團伊玖磨『素戔嗚』
世界初演(1994年)
「一柳慧」交信
カール・オルフ『カルミナ・ブラーナ』

開館20周年

1998
横浜みなとみらいホール
開館

10's-20's

00's

絢香、コブクロ、斉藤和義、
ずっと真夜中でいいのに。、AAA、
ナオト・インティライミ、秦基博、back number、
flumpool、milet、遊助、YUKI

aiko、いきものがかり、及川光博、
ORANGE RANGE、倉木麻衣、
クレイジーケンバンド、ゴスペラーズ、
スピッツ、一青窈、山崎まさよし、レミオロメン

1999



2022



2013



2009



2007



広い舞台と充実した舞台機構を活用し、オペラ、バレエ、オーケストラなどの大型公演を届けてきた大ホール。

大ホール

さらに、ポップミュージックのコンサート、国内外の演奏家によるリサイタル、合唱や吹奏楽の公演など、幅広く県民に開かれてきました。オペラの自主制作では、他県の公立劇場との共同制作、県域巡回公演などにも取り組んでいます。

ここでは、大ホールが神奈川県において果たしてきた役割について、神奈川新聞社 元文化部長の丸山孝さんにふりかえっていただきました。合わせて、ホール主催のプログラムを中心に紹介します。



オペラ、バレエやダンス、オーケストラ——。

約2500人の観客を魅了するステージが

繰り広げられた場所

「ファンタスティック・ガラコンサート2023」
写真：長谷川清徳

芸術のまちを育てたホール

新聞社の支局勤めを経験すると、市町村でときおり持ち上がってくるのが文化ホールを造るか、否かというような議論です。「いなかで交響曲を鳴らしてどれだけお客が集まるんだ」。今なら暴言と非難されかねませんが、議員や市民からこんな声が上がったこともあります。ただ、建設費やその後の維持費を考えると無理からぬ本音でしょう。どの自治体も予算が厳しい。それに、ただ設置するだけで地域の文化レベルが高まるわけではないだろう、という意見には共感できます。

ホールができれば芸術のまちが育つか——。プロやアマチュアの楽団に貸館を行う「ハコモノ」の役割だけでは機能しないでしょう。創造や発信、さらに市民が積極的に運営にかかわってくるような土壌も不可欠だと思います。ところがこれらを可能とする大型施設が1975年、音楽や演劇の専用ホール建設ラッシュが始まる80年代より早く横浜に誕生しました。

山下公園を望み、マリントワーやホテルニューグランドが立ち並ぶ観光名所に現れた神奈川県民ホールを目にして、中学生だった私の心は妙にときめきました。何かが始まると

いう予感のようなものがあつたのかもしれません。巨艦のような建物ではなくと前面ガラス張り。当時は、コンクリートで固められた直方体の団地ばかりが各地に目立っていたのですから、とにかく異彩を放ちました。ロビーには赤いカーペット。タ刻になるとその紅色を含んだ光彩が威容を浮かび上がらせて、まるで神殿のようでした。

オペラや交響曲、ポップスも受け入れる2500席近い大ホールは驚きでした。「聴衆との間に響きあい、生まれる音がライブの醍醐味です」。学生時代、グリーククラブで指導してくれた指揮者福永陽一郎さんが、こんな風に語ってくれたことがあります。ネットやオーディオがどんなに発展しても聴衆と向かい合う生演奏の魅力は揺るがない。ホールもまた、音楽の重要なパーツということです。そして横浜では、この県民ホールのほかにも室内楽の県立音楽堂、演劇拠点である県立青少年センターがそれぞれすぐれた創作力、企画力を発揮しました。文化の「キング」「クイーン」「ジャック」というべき3拠点が県民の芸術活動を高めたことは疑いありません。市民の合唱団や劇団の数が全国有数を誇るという活

英国ロイヤル・オペラ2024年日本公演『リゴレット』
写真：長谷川清徳

オペラ



開館時から、数々のグランドオペラを上演してきました。ベルリン・ドイツ・オペラによるワーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』（1987年、全曲日本初演）は、日本のオペラブームを加速させ、その後も国内外からのツアー公演が次々と行われました。1994年にはオペラの自主制作をスタートし、今日にも受け継がれています。

一柳 慧×白井 晃 神奈川芸術文化財団芸術監督プロジェクト
Memory of Zero (2019年)
写真：瀬戸秀美

バレエ・舞踊



国内だけでなく海外からも様々なバレエ団が来日し、神奈川県のパレエ文化を盛り上げてきました。またクラシック・バレエにとどまらず、県内の舞踊団体と協働で開催された現代舞踊公演、コンテンポラリーダンスを取り上げた「コンテンポラリー・アーツ・シリーズ」など、多様な身体表現が展開されています。

「オープンシアター2022」
写真：川島浩之

オーケストラ



県内にはほかの音楽専門ホールができる1990年代頃までは、オーケストラのコンサート会場としての役割も担ってきました。神奈川フィルの定期演奏会は、今でも変わらず県民ホールで開催され続けています。オペラ・バレエ・オーケストラを同時に楽しめる「ファンタスティック・ガラコンサート」は、毎年多くの観客が訪れる恒例行事となりました。

自主制作オペラの歩み

開館から今日まで、数々のオペラを上演してきた大ホール。1994年からは、作曲家の團伊玖磨を芸術総監督に神奈川芸術文化財団の運営となり、様々な舞台芸術を楽しめる県民のためのホールとして、積極的な自主制作やプロデュース公演などがスタートします。

その最初の取り組みが、同年に始まった「開館20周年記念事業」および「第1回神奈川芸術フェスティバル」で初演された^{すさのお}團伊玖磨作曲のオペラ『素戔鳴』の制作です。

その後、一柳慧や、林光、黛敏郎、三善晃などの作曲で日本オペラを次々に展開していきました。

2007年からは、ほかの劇場とともに『アイダ』や『トゥーランドット』などのグランド・オペラの共同制作を行っています。2022年には、開館50周年を記念するオペラシリーズを開始。次世代のアーティストを起用したシリーズは平原慎太郎の新演出による『浜辺のアインシュタイン』で幕をあげました。

團伊玖磨作曲／オペラ『素戔鳴』初演(1994年)
写真：鍋山英次



一柳慧作曲／オペラ『愛の白夜』3幕5場 世界初演(2006年)
写真：鍋山英次

況ぶりがその証左です。この環境を子どものころから空気のように享受できたことがいかに幸福だったか、いまさらながらに思います。93年には神奈川芸術文化財団が生まれ、県民ホールはオペラの自主制作まで手がけるようになりました。團伊玖磨氏、一柳慧氏という日本を代表する作曲家が芸術総監督にあたってくれたことも大きな要因でしょう。「素戔鳴」などの名舞台が神奈川で生まれたのだから誇れることです。

い問いも投げかけられたのです。しかし、人は歌をなくしては生きてはいけません。死を目前にした人が、幼いころに覚えた童謡を無意識に口ずさむ姿を私は幾度か目にしました。いかなる過酷な状況下でも人は歌を求めます。音楽は心や命を維持するために欠かせない栄養素と確信します。

半世紀を生きた神奈川県民ホールも老いて、25年春に休館するとのことですが、どう生まれ変わるかはわかりませんが、スマホで生活スタイルが激変し、音楽がたやすく手に入らなうのか、ひとつの答えを示してほしいと願います。

(神奈川新聞社元文化部長 丸山孝)

小ホール

小ホールではたくさんのオルガンの演奏会が開かれ、お昼休みの無料コンサート、体験型の公演などをいち早く実施してきました。音響効果の良いオープン・ステージ形式を活かした室内楽や、現代音楽の企画も数多く開催。また音楽にとどまらず、「県民ホール寄席」として落語も長年上演されてきました。

小ホールの代表的なプログラム
の紹介と、県民ホール オルガン・
アドバイザーの中田恵子さんから
のコメントをお届けします。

世代を超えて愛されてきた音色。

県民ホールのパイプオルガンは
国内公立ホールで随一の歴史があります

写真：青柳 聡

オルガン



「オルガン avec バロック・アンサンブル」(2023年)

国内公立ホールで初めて設置された歴史あるパイプオルガン。少しでも多くの人に親しんでもらうために企画された無料の「昼休みパイプオルガン演奏会」は、のちに「プロムナード・コンサート」となり、400回以上開催されてきました。
気軽に楽しめるコンサートだけでなく、本格的な演奏が聴ける「オルガン リサイタル」も継続的に開催しています。

現代音楽・室内楽



「C×C(シー・バイ・シー) 作曲家が作曲家を訪ねる旅 vol.6 酒井健治×クロード・ドビュッシー」写真：平 聡

室内楽の魅力を、広く県民に届ける役割も担ってきた小ホール。現代音楽を扱うシリーズは、「音楽の現在」や「アート・コンプレックス」といったフレッシュな企画が評判を呼び、かたちを変えながら、観客にも親しまれてきました。クラシックの名曲もたびたび演奏され、チェンバロの魅力を紹介する企画も定期的に開催しています。

オルガン・アドバイザーからのことば

神奈川県民ホール50周年。ホール設立と同時に導入されたクライス社製オルガンも50歳を迎えます。50年前の日本にはオルガン付きのコンサートホールはほとんどなく、公立ホールのオルガン第1号として誕生しました。パイオニアとして日本のオルガン界を牽引してきたオルガン、また小ホールという親密な空間に鎮座するオルガン。私は神奈川県民ホールのオルガン・アドバイザーに就任し今年で4年目ですが、これらのオルガンの特徴を活かして何か面白いことはできないか、信頼できる事業課のスタッフと共に試行錯誤の4年間でした。なかでも印象深いのが、2022年度より始めたアドバイザー企画の「オルガン avec」シリーズです。

は当時の様子を覗いていただく感覚で楽しんでいただけたと思います。名手揃いの弦楽アンサンブルにオルガンの音が溶け合い、芳醇な響きにホールが満たされたこと、今も忘れられません。

第二弾は「オルガン avec バレエ」。音楽がBGMに留まらない、視覚的にもバレエと相互に交わる舞台をつくってみたいと考えました。私もバレエの衣装を着てみたり、ペダルソロの超絶技巧とバレエダンサーの足の動きがリンクするような場面を入れたり、それらの試みは遠藤康行さんによる素晴らしい振付・演出のおかげで想像以上の効果につながり、バレエとオルガンが一体感をもつ新しい舞台を生み出すことができました。新しい挑戦には常に緊張が伴いますが、得られるものも大きく、県民ホールでの経験一つひとつが私にとって宝物です。休館後もこのオルガンが、次の50年に向けて歩み続けてくれることを願っています。

中田恵子 なかた・けいこ
オルガニスト。2021年より神奈川県民ホール オルガン・アドバイザー。アンドレ・マルシャル国際オルガンコンクール優勝。キングインターナショナルより、CD「Joy of Bach」「Pray with Bach」(第15回CDショップ大賞2023クラシック賞を受賞)をリリース。



© Toru Hiraiwa

県民ホールのパイプオルガン

1975年1月の開館に合わせドイツのヨハネス・クライス社により設置。三段の鍵盤と2024本のパイプ、音色を調整する30種のストップを備え、バロックから現代まで、幅広いオルガン音楽に対応しています。当初は舞台右側にありましたが、1990年に音響環境改善工事とともに舞台正面に移設され、433席の客席から演奏の様子がより見やすくなりました。オルガンの仕組みを紹介する企画などを通して、子どもから大人まで幅広い世代に親しまれています。

ギャラリー

県内屈指の広い展示室を有する
ギャラリー。

開館当初より現代美術の一つの
発信地として、同時代のアートを
様々な切り口で紹介してきました。

多くの人でにぎわった大規模な国際版画展、
数々のアーティストが名を連ねてきた「現代作
家シリーズ」、パフォーミングアーツとのクロス
ジャンルの取り組みもこのギャラリーならではの
魅力です。また県内最大規模の公募展である
「神奈川県美術展」では、延べ約5万人が参加
し、多くの美術愛好者に親しまれてきました。

時代とともに多様な表情を見せてきたギャラリーの歩みを、開館
当初から知る元学芸員の藤嶋俊會さんのコラムでふりかえります。

多くのアーティストが挑んできた
巨大な吹き抜け空間には
芸術への熱い思いが
刻まれています

5Rooms—感覚を開く5つの個展 (2016)
丸山純子「名もなき船のモニュメント」
写真：Takeru KORODA

県民ホールギャラリー開館50年をふりかえる

1975（昭和50）年1月17日神
奈川県民ホール・ギャラリーは第10
回神奈川県美術展で幕を開けました。
それまでバラバラの会場で開かれて
いた県美術展を一堂に会して開催で
きるようになったのです。なお会期
は日本画、洋画、版画、彫刻、立
造形の前期と工芸、書、写真の後期
の二期に分けて展示されました。「充
実した日本画」と近代美術館研究員
の足立朗さんは神奈川県新聞の「美術
展から」で評しています。この時の
大賞は全部門で争って選ばれた、日
本画の大山鎮「語り」が受賞しまし
た。

続いて開館記念事業としてギャラ
リーを特徴づける企画展が開催され
ます。初代ギャラリー課長に就任し
た柳生不二雄さんは、1951（昭
和26）年鎌倉に建設された近代美術
館の最初の学芸員の一人です。柳生
さんは美術館に約10年在職後、民間
の画廊経営に携わります。官民双方
の経験を活かしたギャラリーの方針
が着々と実行に移されます。それは
現代作家に焦点を絞ること、具体的
には日本画、洋画、版画、彫刻、立
体造形、現代工芸の作家による作品
展の開催、天井高6・5mの展示室
を生かした彫刻展の開催、版画はア
ンデパンダン方式にすること、5年

（元神奈川県民ホールギャラリー
学芸員 藤嶋俊會）

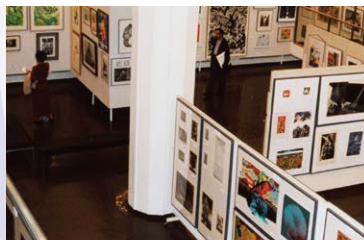
ごとに記念展を企画することなど
でした。決して理路整然とした体系に
基づいて具体案が導き出された訳で
はありません。柳生さんの長年の体
験が培った独特のバランス感覚に根
ざしていたのです。また県立施設の
不自由さを苦にせず、臨機応変の方
法で事業を実現してきました。こう
して近代美術館とも異なる道を歩み
ながら、しかしすでに市民に親しま
れていた横浜市民ギャラリーと肩を
並べて、ただ前進あるのみ。スター
トを切ったのです。神奈川県では長
知事の下で文化行政が様々な分野で
議論されました。横浜市では飛鳥田
市長の下で6大事業がスタートしま
す。町名のサインなど街の様相が少
しずつ変わってくるのが目に見えて
きます。それまで行政が文化に近づ
くことはタブー視されていたのが見
直され、文化の基礎造りに関わる必
要があると理解されはじめたのです。
ギャラリーで企画展があると、昼休
みなどに知事を招き、作家と一緒に
美術談義のひとつをもちこたし
ばしばありました。開館50年の時間
は、そうした先人達の仕事をふりか
えることの大切さを強く感じさせま
す。

現代作家シリーズ 1975-1999



絵画、彫刻、工芸、インスタレーションなど様々
なジャンルから第一線のアーティストをとりあげ、
現在の企画展への潮流をつくりました。

神奈川国際版画アンデパンダン展／ トリエンナーレ 1975-2001



「神奈川国際版画アンデパンダン展」から、コンクール形式の「神奈
川国際版画トリエンナーレ」へと変革をとげ、「ザ・版画」をはじめ多く
の事業を展開。版画のカナガワとして国際的な広がりをみせました。

アート・コンプレックス 2007-2015



芸術総監督・一柳慧のコンセプトの下、
美術と音楽、舞踊などのパフォーミング
アーツを複合的にプロデュースしたシリーズ。



「カナケン」とポップミュージック

県民ホールはポピュラーミュージック関係者の間では「カナケン」の愛称で知られます。この50年間に多彩かつ多数のアーティストたちが舞台を彩ってきました。

FMヨコハマで『MORNING STEPS』『PRIME TIME』のDJを歴任し、長くこの地域における音楽シーンを見守り、紹介役を担ってきた栗原治久さんにインタビュー。放送メディアという立場からみた神奈川のポピュラー音楽の隆盛ぶり、「カナケン」の舞台に立つことの意味など、お話をいただきました。



栗原さんは神奈川という土地は「ポップスの宝庫」と話します。

「900万人以上という巨大な人口をもつ神奈川県は、その豊かな土壌のおかげで、多彩かつ豊富なポピュラー音楽を生みだしてきました。クレイジーケンバンド、ゆず、矢沢永吉、柳ジョージ、秦基博、瑛人などに代表される「横浜サウンド」、加山雄三、南佳孝、TUBE、キマグレンなどの顔ぶれの「湘南サウンド」、それに加えて「県央サウンド」もありますよ——いきものがかりなどがその代表です。こんなに豊かに音楽を育んできた土壌は、ほかにあるでしょうか？ 紹介しがいいのある土地柄なんです」

たしかに「カナケン」の舞台出演者にも大勢の神奈川出身のアーティストがにぎやかに名を連ねています。この舞台を「ホーム」と呼んで全国ツアーのフィナーレをここで開催することにしているアーティストもいるのだとか。

また、邦楽だけではなく、海外アーティストの音楽の聖地でもあった横浜・山下町界隈。

「そもそも横浜は洋楽文化発祥の地ですからね。東京にこんなに近いのに、海外アーティストたちがこぞってカナケンでコンサートを開いてい

ますよね。そしてテレビ神奈川（TVK）にも洋楽番組が数多くあって、僕もその司会を務めて洋楽も紹介してきました。横浜は、そしてカナケンは洋楽文化もまたけん引してきましたよね」

洋楽・邦楽問わず数多くのポピュラー音楽を紹介し続けた横浜の放送メディアとコンサートホール。では、両者はどのような関係にあったのでしょうか。

「かつてラジオは新しい音楽を真っ

先に紹介する役目を担っていました。アーティストが楽曲リリースをするたびに、レコード会社の宣伝担当者は新人のラジオ・プロモーションを大事に考えて売り込んできたものでした。それは、ラジオは感情・情緒のメディアなので、DJが『いい曲だよ』『このアーティストが最近の心に入ります』と話す、リスナーの心に響くという効果があったからなのです。近年はその役割はSNSやYouTubeに譲った感がありますが、今でもラジオという媒体を大切にしているアーティストがたくさんいる理由は、ラジオが声を通しての一对一のパーソナルな情緒で結ばれた関係性を大事にしているからだと思います。

そして「カナケン」はアーティスト

が目標とする『メインステージ』という大きな役割を果たしてきました。さらに、メディアで知ったファンが『ついに生で会える』場所でもあるわけなんです。それはアーティストにとっても同じで、現代では貴重な、直接の体験と交流ができる場所。『カナケン』はそんな最高の瞬間を迎えるメインステージとして音楽シーンを活気づけ続けてきたんですよ、50年にもわたって。敬意を感じます！」



栗原治久 くりはら・はるひさ

1992年にFMヨコハマのDJコンテストで優勝しラジオ業界へ。2001年からはFMヨコハマの『MORNING STEPS』を、2017年から『PRIME TIME』を担当。ラジオDJ、クラブDJ、司会など広く活躍する。

異界に挟まれた、宙づりのヴェニユー

沼野雄司(神奈川県民ホール・音楽堂芸術参与)

中華街の駅で地下鉄を降りる。

細い道を数分歩いて、自転車ショップや蕎麦屋の向かい側の入り口から、ホールの建物へ。ギャラリーを正面に見ながら左手の階段をのぼると……。正面のガラス窓の向こうは海なのだ。早く着き過ぎた時にはそのまま海側のドアから出て左手のほうにあるコーヒータ屋のテラス席で本を読むこともある。

メインロビーが2階に位置していることもあって、どこか宙づりのようにも見えるこのホールは、中華街と海という、二つの異界に向けて入口／出口がしつらえられている点において、なんとも個人的な存在だ。こんな不思議なロケーションのホールがほかにあるだろうか？

およそ6年前、芸術総監督の一柳慧さんに「推薦をいただいて、この宙づりヴェニユーの仕事を手伝うことになった。」

最初に皆で話しあったのは、いかにして小ホールのプレゼンスを増すか。使いやすいサイズのはずなのに、もうひとつピリッとした存在感が発揮できていない。多くのスタッフにアイデアを募った結果、2021年から始まったのが「C×(シー・

バイ)」のシリーズだった。

過去の作曲家と現在の若い作曲家の対話、いわばねじれた二人展である「C×C」は、第1回の「山本裕之×武満徹」から3年を経て順調に続いており、幸いにして、すでに首都圏の現代音楽ファンの誰もが知る存在になっている。さらに中田恵子さんをアドバイザーに迎えたオルガンシリーズでも新しい試みが次々に行われており、この小ホールに新しいイメージをもたらしたように思う。

現代アートにとって大事なものは何だろうか。意志、技術、知性、批評性、企み、政治性、粘り強さ……等々。どの点に重みを置くかはひとつによって異なるが、何より大事なことはこれらによって、われわれの生活や実存に、ある種の摩擦がもたらされる点だろう。摩擦がなければ、それはただのつべりした日常にすぎない。その意味でここ数年、400席ちょっとのサイズをもつこのホールは——小さいながらも——ちょっとした摩擦の発信地になり得ていたのではないか。

そして、メインの大ホール。やはり6年前からわれわれが取り組みはじめたの

が、開館50周年記念となる大規模な総合

芸術作品の上演だった。当初、単に「オペラ」と呼ばれていたこの企画は、しかし、単なるオペラではなく何らかの「新しさ」を含むものでなければいけない、という総監督の強い意向によって二転三転し、結果としてたどり着いたのが、オペラならざるオペラ、フィリップ・グラスの「浜辺のアインシュタイン」だった。

日本で上演されること自体30年ぶりなのに、くわえて、そもそもロバート・ウィルソンの演出が前提になっているこの作品(グラスとの共作としてクレジットされている)を、平原慎太郎の新演出で行うというのだから、かなり冒険的なプロジェクトである。多くの方々の献身的な努力が実って、2022年にこの企画は成就した——初日の前日に一柳総監督がこの世を去ってしまったのは、予想外の哀しい出来事ではあったけれども。

あれから2年、本年の10月にはこの50周年企画の第二弾として、サルヴァトーレ・シャリーノ「ローエングリン」が上演される。これもまたオペラならざるオペラであり、一柳総監督の見えざる意志

の賜物といっぴよい。

総監督は同時に、ギャラリーの活性化も常に気にかけておられた。宙づりヴェニユーの地下部分に位置する広大な空間で音楽の演奏を行なうことを彼は好んでいたが、考えてみれば若き日にニューヨークで前衛美術家たちと親しく付き合った彼にとって、美術や音楽は個々の独立した存在ではあり得ず、むしろそれらの混交こそが自然な姿だったというべきなのだろう。そうしたヴィジョンを現実化する場所として、県民ホール以上の場所は日本には存在しなかった。

さて、一柳総監督がこの世を去ったあと、まるでそれを追うようにして県民ホールもその生涯を終えることが決まった。人間と同じく建築も古びてゆくから、寿命が来るのは必定。しかし、建物がなくなったとしても、二つの異界に挟まれたこのホールのゲニウス・ロキ——すなわち地霊——はけっして変わることがない。遠からぬ日に、ここにまた新しい異物が誕生し、さらに大きな摩擦を引き起こすことを願っている。

音楽、言葉、美術、建築など多方面に関心を広げ、
新しい表現を追求し続けるダンサーの平原慎太郎さん。

2022年にオペラ『浜辺のアインシュタイン』(以下『浜辺』)*1の新演出・振付を手がけ、
好評を博しました。県民ホールでの制作や劇場への思いをお話いただきました。

「『浜辺』を演出されて2年ほどが経ちました。県民ホールでの制作はいかがでしたか？」

県民ホールの舞台は横長で間口が広いのが特徴です。それって日本の絵巻物と似ているなど。絵巻物は、巻物をときながらストーリーが進んでいくものだけれど、もう一つ面白いのが、全部開き切った古い時間と新しい時間が一緒に描かれていること。空間デザインの木津潤平さんとこんな風に話をしたことが、なるべく横向きに進んでいくような最初の演出のヒントになりました。この舞台では、様々な分野で活躍する人たちと一緒に、つくることができ、僕が考える劇場像のようなものを実現できたと思います。どの層の観客にも何かフィットできる要素があって、新たな何かに出会える。そういう構図をスタッフさんたちがどんどん受け入れてくれました。

「Organ Worksの公演では、劇場空間への工夫もされていますね。」

今年の新作公演では終演後にロビーをひらき、出演者や観客同士が公演について話し合える場づくりを試みました。劇場を誰もがワクワクする場所にしたいんです。劇場についてよく考えるようになったのは、スペインで市民の生活に根づいた公立劇場を見たことが大きい

平原 慎太郎 Shintaro Hirahara

ダンサー／振付家

特別な体験を日々の生活のなかに
劇場のあり方を考え続けたい

PROFILE

クラシックバレエ、ヒップホップのキャリアを経て
コンテンポラリーダンスの専門家としてダンサー、
振付家、ステージコンポーザー、作家など多分野で活動。
シアターカンパニー「Organ Works」主宰。
自作品発表のほかには前川知大などの演劇作品にステージングとして参加。
またDancing Glass(イタリア)での作品発表など海外での活動も多い。



*1 神奈川県民ホール開館50周年記念オペラシリーズ
Vol.1 ロバート・ウィルソン／フィリップ・グラス『浜辺のアイ
ンシュタイン』〈一部の繰り返しを省略したオリジナルバージョン
／新制作／歌詞原語・台詞日本語上演〉(2022年)

す。特別な体験が日々の生活のなかに溶け込んでいて、市民とプロが触れ合える機会もある。自分が関わる公演もそういうものになりたいと思いました。今はSNSなどでダンスや音楽に容易に触られますが、知ることはできても体感できる場所は多くない。そこに劇場の存在意義があると思います。自分がただつくりたいものを見せるのではなく、劇場という場をいかに理解して向き合えるか、常にお題を突きつけられていると思っています。

「次に挑戦したいことはありますか？」

またオペラをやりたいです。『浜辺』で自分の幅が広がったし、僕が専門とするコンテンポラリーダンスは、異なるジャンルの機能と機能、そして人と人を結ぶ架け橋になれるものだと感じました。そこで育った自分だからこそ、総合芸術のディレクションに挑戦し続けたいという思いがあります。

1990年代から『エレベーターガール』などの写真シリーズで注目を浴び、2010年代は演劇プロジェクトや野外劇、最新作では鉄作品のインスタレーションを手がけるやなぎみわさん。美術家とは何かを問うように、型破りな表現に挑み続けてきたアーティストです。県民ホールギャラリーでは2019年に、大規模個展「神話機械」を発表しました。

「神話機械」は国内5会場をめぐる展示。県民ホールギャラリーでの展示はいかがでしたか。

空間が一番ダイナミックで面白かったです。各地の公立美術館って、独特のカタチがありますよね。でも県民ホールギャラリーはすごく劇場的な感じがして。神話を演じる4台のマシン『神話機械』を展示した吹き抜けで、一人芝居と音楽のライブパフォーマンスも行いましたが、空間のつくり方をほかの会場とはけっこう変えたんです。お客さんはバルコニーから見下ろせるし、見え方が全然違っていました。

福島の子の果樹園で撮影した桃の写真作品『女神と男神が桃の木の下で別れる』を展示した部屋は、壁を黒く塗れたので県民ホールの展示が一番暗く、インスタレーションとしての完成度が高いものになったと思っています。

K A Tではやなぎさんの演劇作品の上演や、ステージトレイラープロジェクトのプロデュースも行っており、横浜とのゆかりが深いですね。

2022年に逝去された芸術総監督の一柳慧さんには、ほんとうに感謝しています。一柳さんのおかげで、面白い経験をももらせていただいています。その一つが2019年度に始まった大岡信賞の審

PROFILE

1993年エレベーターガールをテーマにした作品で初個展、以後国内外で個展多数。
2009年第53回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館代表作家。
2011年より演劇活動を開始し、近代美術の黎明期をテーマに美術館や劇場で公演、北米ツアーも果たす。
2019年個展「神話機械」が美術館巡回。台湾製の特設車両による野外巡礼劇「日輪の翼」は、2016年横浜初演、2019年神戸では海上公演が実現した。近年は台湾にて野外歌劇も作演出している。

これからの県民ホールも、アートセンターのような場になっていく



美術作家／舞台演出家

やなぎみわ Miwa Yanagi



『女神と男神が桃の木の下で別れる』(2019年)



ライブパフォーマンス『MM』(2019年)
構成・演出：やなぎみわ 出演：高山のえみ
音楽：内橋和久 写真：bozzo

査員です。一柳さんと審査会で一緒にいたのは一度きりでしたが、ほかの審査員はみな文学者のなか、貴重な経験になっています。美術作品は物語ではなく、詩に近いものだと思っています。大岡信さんも一柳さんも、美術や文学、音楽といったジャンルに垣根をもたない方でした。これからの県民ホールも、アートセンターのような総合的なものになっていくのでしょうか。

やなぎさんは横浜と同じく、港町の神戸生まれですね。

このエリアに来るとすごく懐かしいんですよ。トレイラープロジェクトで、舞台車が台湾から船で本牧ふ頭に入った時は感動しました。そこへトレイラーヘッドが迎えに行き、ドッキングして、K A Tの前を通り過ぎて新港ピアに走っていく。港って、そういうダイナミックさ、荒々しさがあるじゃないですか。港町の気風は作り手としても魅力に感じるし、アートにも合っていると思います。

開館から50年、第一線で活躍するアーティストに「会える場」としての役割を担ってきた県民ホール。アーティストたちの熱量あるパフォーマンスは、現在も多くの観客を魅了し続けています。またプロフェッショナルだけでなく、県民の発表の場としてもひらかれてきました。

県民ホールとゆかりの深いアーティストや団体の皆さまからコメントをいただきました。

沢田研二

世界中のホールの中で神奈川県民ホールは僕のBEST2のホールです。音の響きが素晴らしいのは勿論、ステージ上からの満員の客席は絶景なのです。もう一つ、世界最長？のステージ幅、ステージセンターから上下（かみしも）に走ってもまだ端まで行けないと毎回思ったものです。今の僕にはとてもハードなホールなのですが大好きなホールです。まだまだ楽しい思い出を神奈川県民ホールで創りたいものです。

及川光博(ミュージシャン・俳優)

50周年、おめでとうございます！ ミッチーです！

大学時代、横浜でアルバイトをしていた私にとって、カナケン（神奈川県民ホール）は憧れの会場でした。そしてデビューから数年後、初めてそのステージに立てたときは、まさに夢が叶った瞬間でした。以来20年以上、毎年お世話になっています。音響もとても良く、客席の拍手喝采も大きく響いて、感動を与えるべき立場ながらいつも感動をいただいています。ビバ！カナケン。

ちゃおー☆



清水哲太郎・森下洋子(松山バレエ団)

神奈川県民ホールが地球、人類の常識を超え、時代を越え、次々と新鮮な文化芸術を宇宙に届けと奮闘して来て下さった歴史が、たくさんの人々の希望と幸せを育んでくださいました。そして私達芸術家の魂の底に、人間を愛する心を産み付けてくださった感謝は、計り知れません。神奈川県民ホールが存在している限り私達は恐れを知りません。なぜならこの劇場が、私たちに愛するとは何と教えてくれたのですから。



塩田千春(現代美術家)

神奈川県民ホール50周年おめでとうございます。1500平米のギャラリー空間の5部屋すべてを使って「沈黙から」という個展をさせていただいてから17年。今思えば私がアーティストとしての活動の場を広げるきっかけとなったのがこの展覧会でした。この展覧会があったからこそ、今の私があると思っています。本当に心から感謝しています。



Chiharu Shiota
Berlin, 2023
Photo by Sunhi Mang

千田 豊(神奈川県吹奏楽連盟 理事長)

50年前の3月、開館したばかりの神奈川県民ホールにて、東京フィルハーモニー交響楽団の演奏によるドボルザークのレクイエムを聴きました。音響の良さは言うまでもなく、ロケーションの素晴らしさは、国内随一でした。

神奈川県吹奏楽連盟は、3月16日に開館記念行事の一つとして、「県民吹奏楽の集い」を実施、それ以降、

吹奏楽コンクール神奈川県大会を始め、関東大会、東関東大会、全日本大会等、数々の大会や記念行事をこの県民ホールで開催してきました。吹奏楽と合唱による総勢400名超で演奏したことなど、県民ホールでの思い出は、尽きることがありません。

我が心のふるさと、神奈川県民の心のふるさと…一日も早く、また会えることを切に願っています。





高橋真梨子

開館50周年おめでとうございます。
横浜の海沿いに凛として佇む神奈川県民ホールは、ナンバーワンと言っていいくらい私の中では大好きなホールです。ホワイエから見えるきれいな海や夜景は、訪れた人々の記憶に残っていることでしょう。会場で過ごした特別な時間が、私の歌とともに観客の皆様の思い出の1ページに刻まれていたら嬉しいです。

沼尻竜典(神奈川フィルハーモニー管弦楽団 音楽監督)

小学生の頃、母に連れられていった県民ホールで、小澤征爾指揮の「ボリス・ゴドゥノフ」の公開リハーサルを見学したのがオペラ初体験だった。それから数十年後、十年も経って自分がその場所でオペラを演奏することになろうとは。
東日本大震災で中止になった「アイダ」は、新規オープンに是非考えていただきたい。
ピットにはぜひ神奈川フィルを



黒田 博(二期会幹事長)

神奈川県民ホール開館50周年おめでとうございます。
この伝統ある舞台に於いて2001年から数々のオペラ作品に出演させていただきましたが、2015年には黛敏郎「金閣寺」に出演いたしました。舞台稽古初日に、舞台上に燦然と輝く金閣寺が現出したときは、出演者全員から歓声があがり、興奮したことを覚えています。今後も独自性のある企画が展開されることを願っています。

下田 等(株式会社ケーエムミュージック 代表取締役)

県民ホール「開館50周年」おめでとうございます。
春夏秋冬を演出してくれる公園通りの銀杏並木、隣接する「神奈川県民ホール」。師匠「寺内タケシ」さんのコンサートで初めて利用してから「45年」多くの演者さんや足を運んでいただいたお客様と夢や感動を共にしてきました。この思い出深き「芸術文化施設」に感謝！



©Keiichi Kimura

柳澤涼子(NPO 法人横浜シティオペラ 理事長)

神奈川県民ホール創立50周年、まことにおめでとうございます。
私も横浜シティオペラはもう40年近くのお付き合いになるかと思えます。神奈川オペラフェスティバルや歌曲コンサート等の開催に際し、いつも暖かくお支え下さいましたこと感謝にたえません。神奈川県民の芸術文化の発信地として更なるご発展を願い、心よりお祝い申し上げます。

鈴木和子(神奈川県芸術舞踊協会 会長)

開館の翌年1976年より共同主催、1994年よりは共催を頂き毎年大ホールにおいて公演を開催してまいりました。
舞台の「立端(たっぱ)」の高さを活かした大掛かりな舞台装置は今でも見ることができますが、開館当初は「せり」「スライディング」の舞台機構をフルに活用した作品もあり、お客様はもとよりダンサー達にとっても魅力的な舞台であり劇場でした。無くなってしまうことを惜しみつつ感謝の気持ちを捧げます。



齋藤友佳理(東京バレエ団 団長)

開館50周年おめでとうございます。横浜育ちの私にとって、神奈川県民ホールは幼少期に本物のバレエとの出会いをもたらしたバレエへの道を促してくれた場所であり、また再起不能とまで言われた怪我からの復帰を果たした、二重の意味で原点と言える劇場です。かつて西洋文化の入口であった街と劇場の誇りのもと、ますますの発展をお祈り申し上げます。



写真：引地信彦

砂川涼子(藤原歌劇団)

この度は、50周年おめでとうございます。これまで、多くの素敵なアーティストの方が、神奈川県民ホールの舞台に立つ事を目標に精進されてきたことと存じます。私もその中の1人です。これからも県民の皆さまと共にある存在感のあるホールとして、素敵な公演を楽しみに、神奈川県民ホールのご発展を心から願っております。



©Yoshinobu Fukaya

千田善道(有限会社神奈川芸術協会 代表取締役)

かつて世界の一流劇場の絢爛豪華な舞台装置が横浜港で陸揚げされ初日を迎える、まさに日本の舞台芸術の最先端を担ってきた功績ははかり知れません。
神奈川県民ホール開館の2年後、神奈川芸術協会も横浜の地に誕生しました。
お客様に育てられながら神奈川県民ホールと共に歩んできた50年です。
開館50周年おめでとうございます。



濱永廣生(ごらく茶屋)

あっという間の、あれから50年
“泉谷しげるライブ”(1975年2月4日)からの付き合い。
「まるで運動会に来たようだ」と苦笑いされた大ホール。
横浜労音からハマ音、そしてごらく茶屋までの50年。
大・小ホールで国内外の多彩な企画が実現出来た。
中でも43年、421回続いた小ホールでの“県民ホール寄席”は宝物だ。
再館への期待も込め、50年ありがとうございます！



五木ひろし

開館50周年おめでとうございます。神奈川県民ホールでは、1976年から約半世紀、数多くコンサートをさせて頂きました。ファンの方たちにとっても馴染み深いですし、歌手生活60年のコンサートも開催するなど、私の歌手人生にも欠かせない会場です。これからも変わらずお客様を温かく迎えてくれる会場であることを願います。



メッセージをありがとうございました。

ここでご紹介できたのはほんの一部の方々です。これまでたくさんのアーティスト、ご利用者・団体の皆さま、そして何よりご来館くださいました皆さまに支えられ、県民ホールは来年50周年を迎えます。令和7年4月以降は老朽化のため休館となりますが、これまで長きにわたるご愛顧、ご来場に心より御礼申し上げます。

(神奈川県民ホール支配人 赤江直美)



REGULAR FEATURE

本誌では、毎号以下のコンテンツをお届けします。

アートシーンプレイバック

「第8回横浜トリエンナーレ」が開催された2024年上半期。

横浜のほか、箱根や横須賀、葉山、茅ヶ崎でも
充実した展覧会が開かれた「美術プログラム」から、
県内のアートシーンをふりかえります。



つなぐ — 社会と芸術

あらゆる人たちが芸術文化に親しむことができるよう、
神奈川県内の文化施設や団体では様々な取り組みを行っています。
インクルーシブなアプローチを中心に、社会と芸術をつなぐ事例をご紹介します。



公演の舞台裏

普段は縁の下の力持ちとして様々なかたちで公演を支え、
「舞台裏」で活躍するスタッフの技術やその仕事について取り上げます。
今回は[舞台監督編]をお届けします。

アートシーン ▶ プレイバック

2024年上半期の美術プログラムをふりかえる

2024年3月、横浜美術館が3年に及ぶ改修工事を終え、「第8回横浜トリエンナーレ」でリニューアルオープンしました。
3年間の休館を踏まえて、神奈川県下の動きをふりかえます。

文：村田 真（美術ジャーナリスト）

「フィリップ・パレーノ：この場所、あの空」

ポーラ美術館といえば印象派のコレクションで知られますが、近年は現代美術の紹介にも力を入れています。パレーノは現代のフランス美術を代表するアーティスト。この展覧会のために構成した映像や音、バルーンなど多彩なメディアによるウィットに富んだ作品が見られます。アトリウム ギャラリーでは「HIRAKU Project Vol.16」と銘打って眼鏡や単眼鏡などの視覚装置に写真黎明期のイメージを焼きつけた鈴木 のぞみの個展が同時開催されているので、見逃さないように。

会場 | ポーラ美術館

日程 | 2024年6月8日～12月1日

主催 | 公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館

《私の部屋は金魚鉢》

展示風景：ポーラ美術館、2024年

Photo © Andrea Rossetti



川田知志 展示風景 2023 写真：木暮伸也



今年上半期の一番の話題は、横浜美術館が3年に及ぶ改修工事を終え、「第8回横浜トリエンナーレ」でリニューアルオープンしたことです（ただし横トリ終了後、来年2月まで再び休館*）。横トリについては後述するとして、まず3年間の休館について述べましょう。

この3年間（来年2月までだと4年間）、横浜市には総合的な美術館が一つもありませんでした。人口370万人を超える日本一の市に、まともな美術館が一つもないというのは異常事態です。そう思ったのは、

今年初めにロサンゼルスを訪れ、横浜とほぼ同じ人口なのに大規模な美術館が5館も6館もあったからです。それが先進国の標準でしょう。もちろん横浜は東京に近いので、見たければ東京に行けばいいともいえますが、それでは独立した都市とはいえないし、「創造都市」の名が泣くというものです。

ちなみに川崎市も5年前に市民ミュージアムが水害に遭ってから休館中で、丘の上の岡本太郎美術館しかありません。だから東京に住む人たちはこの3年間、合わせて

500万人を超える川崎・横浜の大都市圏を素通りして、三浦半島や湘南の美術館まで足を延ばしていました。今年上半期だけでも、横須賀のカサヤの森現代美術館でヨーゼフ・ボイス、葉山・神奈川県立近代美術館で吉田克朗、茅ヶ崎市美術館でフランス真悟など、重要作家の個展が相次いで開かれています。

なかでも注目したいのが、箱根・ポーラ美術館で開催中の現代のフランス美術を代表するアーティストによる「フィリップ・パレーノ…この

「味／処」

タイトルは、「味のある空間で、味のある作家の、味のある作品を」味わってもらおうという意味だそうです。普段展示に使わない通路や階段下などの空きスペースにとばけた映像を流す倉知朋之介、堅牢な壁を支持体とするフレスコ画を頼らない綿布の上に描いている川田知志、薄暗く閑散とした大ギャラリーにひそかに光や音を配した今村遼佑など、味わい深い作品に出会えました。

会場 | 神奈川県民ホールギャラリー

日程 | 2023年12月17日～2024年1月27日

主催 | 神奈川県民ホール

場所、あの空」展。箱根という場所性を生かしたインスタレーションが新鮮です。

ところで、横浜美術館ができるまでは、横浜市民ギャラリーと神奈川県民ホールギャラリーとその代役を担っていました。市民ギャラリーは駅から遠く離れてしまい、かつての勢いを失いましたが、県民ホールギャラリーは年1回すばらしい企画展を催しています。昨年末から今年初めの企画展は「味／処」というもの。

展示はともかく、残念だったのは、ぼくが会場にいた30分ほどの間、一人もほかの観客に会わなかったことです。個人的にはゆっくり鑑賞できたのでよかったのですが、これだけの力作がわずかな人の目にしか触れないのは実にもったいない。ぼくは東京在住なので県の広報は届きませんが、職場もアトリエも横浜にあるのに、この展覧会のことを知ったのは会期が始まってからのことでした。これは今回に限った話ではなく、毎年

のことです。県民ホールはぜひ広報にも力を入れてほしいと思います。さて、「第8回横浜トリエンナーレ」は、リニューアルオープンした横浜美術館全館を使つての開催です。展示室だけでなく、中央のグランドギャラリーや外壁まで作品に覆われているので、どこがリニューアルされたのかわからないほど。今回のアーツ・ウィーク・ディレクターは、中国を拠点とするリウ・ディンとキャロル・インホワ・ルー。彼らの掲げたテーマは

「野草…いま、ここで生きてる」というもので、魯迅が100年前に書いた詩集に由来するそうです。

またこのテーマに合わせて、BankART 1929と黄金町エリアマネジメントセンターでは、それぞれ「BankART Life7」「黄金町バザール2024」を開催。「アートもりもり！」と称して、みなとみらいだけでなく、関内、ポートサイド、黄金町などの街なかに作品を展開し、にぎわいを与えていました。

第8回横浜トリエンナーレ 「野草：いま、ここで生きてる」

魯迅が提唱した民衆のための木版画運動をはじめ、少数民族やアウトサイダーの絵画、様々なデモを捉えた映像、戦時下を生き延びた人たちの作品など、これまでのモダニズムの芸術観から外れる表現が集められていて、とても衝撃的でした。同時にこれらは、過熱するアートマーケットやエンタメ化する美術表現への反動とみられることもできます。「アートとは何か、何のためのアートか」を考えさせられました。

会場 | 横浜美術館、旧第一銀行横浜支店、BankART KAIKOほか

日程 | 2024年3月15日～6月9日

主催 | 横浜市、公益財団法人横浜芸術文化振興財団、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会

「第8回横浜トリエンナーレ」展示風景
写真：富田了平



黄金町バザール2024 展示風景

「アートもりもり！」

「野草」がテーマなのに横浜美術館内に集約しがちな横トリの展示を、もっと街に出していこうという企画。「BankART Life 7」は「Urban Nesting：再び都市に棲む」をテーマに、BankART Stationだけでなく、近くのポートサイド地区や関内の店舗やオフィスのロビー、路上にも作品を展開。「黄金町バザール2024」は「世界のすべてがアートでできているわけではない」をテーマに、主に元違法風俗店舗を改装したスペースで展示しました。

会場 | BankART Station、京急線日ノ出町駅・黄金町駅間の高架下スタジオほか

日程 | 2024年3月15日～6月9日

主催 | BankART 1929、特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンター、初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会など

*1 11月から一部施設オープン、2025年2月に全館オープン



神奈川県あそび歌プロジェクトの体験コンサート「世界のうたとあそぼう！」



各国の食べ物や雑貨販売でにぎわうワールドフード&バザールコーナー(左)、席を立ち、舞台近くで出演者と一緒に踊る子どもたち(中央)、ベトナム出身のトルオン・ティ・トワイ・チャンさんによるスピーチの様子(右)

日本人もベトナム人も、スリランカ人もブラジル人も、大人も子どもも。2024年2月に開催された「あやせ国際フェスティバル」は、綾瀬市で暮らす人たちの生き生きとした表情が、会場のそこかしこに広がった1日でした。22回目の開催となった同フェスティバルは、市民のスピーチや、舞台でのパフォーマンス、そしてワールドフード&バザールコーナーなど、様々なイベントが楽しめる市民手づくりのお祭りです。今年はこのなかで、神奈川県との共生共創事業の一つ「神奈川県あそび歌プロジェクト(以下、あそび歌プロジェクト)」の体験コンサートも開かれました。

約5000人の外国人市民が暮らす綾瀬市は、神奈川県の中でも総人口における外国人比率が第3位の自治体です。元々ベトナム人、ブラジル人が多かったエリアですが、この数年でムスリムのスリランカ人のコミュニティが増えました。そこで2年前から綾瀬市と「あそび歌プロジェクト」が協働し、スリランカのあそび歌に取り組むことに。スリランカ人へのインタビューなどを経てたどりついたのは、スリランカのお料理・ココナツカレーの作り方をテーマにしたあそび歌でした。パンの小麦(ビティ)をふるいにかけて粉にしたり、ココナツを削ったり、といった身振りや歌詞がアクセントになった「ビティコタコタ」が完成。フェスティバルの会場でお披露目されたのです。会場を訪れた小学4年生は「多文化を学ぶため、タブレットでいろんな国の料理教室を調べたことがあります」と話してくれました。「食」は最強の共通言語

かもしれません。このパフォーマンスの特徴は、子どもたちが舞台上がって一緒に遊ぶシーンがあるところ。この日、舞台上上がった4歳の子どものお母さんは「劇場では普通は席を立てないし、まして舞台上がることはない。こういった経験はともありがたいです」と話しました。プロジェクトスタッフの杉原悠太さんはパフォーマンスの狙いについて「多文化社会に触れる足がかりになるプロジェクトではありますが、まずは、『楽しい』と感じてもらうことを目指して、みんなでアイデアを出し合いながら舞台をつくりました」と語ります。綾瀬市で暮らす人たちが、一緒に踊ったり歌ったりしながら楽しんでいる様子が、会場を流れる空気から伝わってきた体験コンサートでした。



取材・文：編集部
写真：大野隆介

『世界のうたとあそぼう!』 in「第22回あやせ国際フェスティバル」

「第22回あやせ国際フェスティバル」

会場 | 綾瀬市オーエンス文化会館・綾瀬市立中央公民館全館
日程 | 2024年2月17日
主催 | 綾瀬市／あやせ国際フェスティバル実行委員会

● 神奈川県あそび歌プロジェクト『世界のうたとあそぼう!』 ●

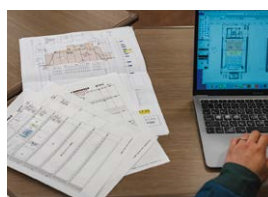
神奈川県には、外国にルーツのある方々が多く暮らしています。「ともに生きる ともに創る」を目標とする共生共創事業では、世界の国の文化に歌や踊りで遊びながら触れるあそび歌プロジェクトに、2020年から取り組んでいます。振付家、音楽家といったアーティストを中心に、世界の「あそび歌」をリサーチし、日本で暮らす子どもたちが誰でも楽しめるように歌詞や振り付けをアレンジ。体験型のコンサートやWEBサイトのレクチャー映像、デジタルリーフレットなどで発表しています。

● 「あやせ国際フェスティバル」 ●

2024年は「見つけよう! 新たに広がる世界観」をテーマに実施。大ホールではスリランカの子どもたちによる合唱や、ヒップホップダンス、民族舞踊などを上演。小ホールでは、ベトナム人女性による難民体験を通じた半生と平和への思いを込めたスピーチなどの催しも。子どもの遊びを用意した体験コーナーは、にぎわいを見せました。

スリランカのキッチンで、お母さんがカレーをつくる様子を子どもたちが真似をするあそび歌「ビティコタコタ」(上)、中央公民館では子どもたちのための体験コーナーも(下)





舞台監督のやりがいについて話す竹井さん(左)、舞台裏で使うランシーバーや時計(中央)、舞台の進行、安全管理に欠かせない図面とスケジュール(右)

公演の舞台裏

舞台監督編

聞き手・文：山崎健太 写真：大野隆介

※本インタビューのロングバージョンはWEBに掲載しています。

舞台監督

竹井祐樹

[たけい・ゆうき] 玉川大学芸術学部卒業。(株)STAGE DOCTOR所属。小劇場からホール公演まで主に演劇作品の舞台監督を務める。近年の参加作品に『らんぼうものめ』(加藤拓也演出)、『漸近線、重なり』(小沢道成×一色洋平演出)、KAAT カナガワ・ツアー・プロジェクト(長塚圭史演出)など。

「舞台裏」で公演を支えるスタッフたちの「技術」をお伝えする本コーナー。今回は、KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト(演出・長塚圭史)やKAATキッズ・プログラム2023『くるみ割り人形外伝』(作・演出・根本宗子)などで舞台監督を務められた竹井祐樹さんにご登場いただきます。演出家たちとともに舞台をつくり上げる舞台監督のお仕事についてお話を聞きました。

——舞台監督という仕事について教えてください。

作品ごとに、あるいは人それぞれでも内容にかなり幅のある仕事なので、一概に「こうです」とはなかなかまとめづらいんですけど、舞台監督の仕事の基本は舞台の進行と安全管理です。稽古が始まる前から本番が終わるまで、それぞれの段階で様々な仕事がある。例えば稽古場を準備したり、美術家のプランを演出家の要望も踏まえて具体的にどう劇場空間に落とし込むかということと一緒に考えたり、ツアーの段取りを組んだり。劇場に入ってから全体の進行を指揮しつつ、俳優やスタッフの安全に気を配る。キュー出しといって本番中に開演や音響・照明の変化、大道具の転換の合図を出しているのも舞台監督です。

——舞台監督のやりがいを感じるのはどういう時ですか。

舞台の進行、安全管理が基本だということとは揺るがないんですけど、僕は舞台監督というのは演出家が行いたいことをかたちにする仕事だと思っています。だから、時に演出に踏み込んだアイデアを出したりもする。舞台監督の領分を越えていると言われることもあります。それを面白がってくれる人もいて、そうやってアイデアを出し合うことで制約のなかでやりたいことが実現できたり、時に演出家の最初のアイデアを超えるものを生み出せたりすることにはやりがいを感じますね。

KAATキッズ・プログラム2023『くるみ割り人形外伝』では、台本に書かれた幻想的な出来事をどう人の手で実現していくかということとを大事にしていました。舞台、芸術への愛を感じる作品でしたし、それが演劇の面白さだと思うので。例えば手紙が飛ばされる場面では、最初はいくつかのギミックを試したんですけど、最終的には、登場人物の「踊り子」の手で手紙が飛ばされる表現をすることになりました。ほかにも嵐の場面では人力で幕を揺らしたり、手持ちの懐中電灯で影を映し出したり。そういうアナログな部分が作品の味になっていると思います。



ひともペットも快適に暮らせる注文住宅

完全フル装備の家®

 富士住建



神奈川芸術プレス 読者アンケート

神奈川芸術プレス(vol.165)をお読みいただき、ありがとうございました。アンケートにお答えいただいた方のなかから、抽選で1組2名様を下記公演にご招待いたします。今後の誌面づくりに生かすため、ぜひご意見・ご感想をお寄せください。

2025年2月23日(日)14:00開演 神奈川県立音楽堂「濱田芳通&アントネッロ モンテヴェルディ オペラ『オルフェオ』新制作 イタリア語上演 日本語字幕付き 全5幕」

アンケート項目

1. 神奈川芸術プレスはいかがでしたか。ご意見・ご感想を教えてください。
2. 今号で印象に残った記事を教えてください。
3. 次号以降、読んでみたい特集テーマがあれば教えてください。
4. 今気になっている「ひと」「こと」「場所」などがあれば教えてください。
5. 神奈川芸術プレスをどちらで入手に取りましたか？

応募方法：「WEBアンケートフォーム」もしくは「はがき」に、アンケートの回答とメールアドレスを明記のうえ、ご応募ください。

WEBアンケートフォーム：https://krs.bz/kanagawaaf/m/kap_165

はがき郵送先：〒231-0023 横浜市中区山下町3-1

(公財)神奈川芸術文化財団 神奈川芸術プレス読者アンケート係

回答期限／はがき必着：2024年11月30日(土)

当選発表：厳正なる抽選のうえ、当選者の発表はメール送信をもってかえさせていただきます。

- ・当選に関するお問い合わせには回答いたしかねます。
- ・当選通知メールは、kaf@kanagawa-af.orgのアドレスから送付予定です。
上記ドメインからのメールを受信できるよう、設定をご確認ください。
- ・メールアドレスの間違い等でメールが送信できない場合は、当選を無効にさせていただきます場合があります。
※お申し込み時にいただいた個人情報は、当選通知以外の目的には使用いたしません。



WEBアンケート
フォームはこちら

今号のプレゼント



「濱田芳通&アントネッロ モンテヴェルディ オペラ『オルフェオ』新制作 イタリア語上演 日本語字幕付き 全5幕」

古楽の新世界を幕開けた天才、濱田芳通&アントネッロが、オペラの原点『オルフェオ』に躍動する命を注ぎ込む！

指揮：濱田芳通 演出：中村敬一

出演：

坂下忠弘(オルフェオ)

岡崎陽香(エウリディーチェ)

中山美紀(ムジカ/プロセルピナ/ニンファ)

彌勒忠史(メッサジェーラ/精霊)

中嶋俊晴(スベランツァ/牧人/精霊)



公演の詳細は
こちら

ご支援のお願い

神奈川芸術文化財団は、心豊かな芸術文化の創造に寄与するとともに、神奈川の地から世界に向けてその発信を回することを使命として活動しております。活動の継続にはご支援が大きな支えになります。皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

- 賛助会員：1年を通じて事業全般にご支援をいただきます。個人賛助会員：30,000円(1口/1年) 法人賛助会員：100,000円(1口/1年)
- 個別協賛：当財団が主催する特定の公演・事業にご支援をいただきます。個人：30,000円～ 法人：100,000円～
- オンライン小口寄付：1,000円からクレジットカードで気軽に寄付いただけます。

賛助会員の特典

- ご芳名を掲載します。○財団主催公演のなかから選定した公演にご招待いたします。○主催公演のチケットを10%引きでご購入いただけます。○限定イベントにご招待いたします。
- 神奈川芸術プレス(年2回発行)をお送りします。○最新のチケット情報をメールでお送りします。

お問い合わせ・お申し込み

(公財)神奈川芸術文化財団 経営企画課 <https://www.kanagawa-arts.or.jp/support> 電話：045-222-0551(9:00～17:00/土日祝日・年末年始を除く)

(公財)神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

五十音順・敬称略(2024年9月1日現在)

【賛助会員】

法人賛助会員：株式会社アクトエンジニアリング / アズビル株式会社 / 学校法人岩崎学園 / 株式会社ヴォートル / 株式会社エス・シー・アライアンス / 株式会社NHKアート / 鹿島建設株式会社横浜支店 / 株式会社勝烈庵 / 一般財団法人神奈川県教育福祉振興会 / 株式会社神奈川孔文社 / 株式会社神奈川保健事業社 / 神谷コーポレーション株式会社 / カヤバCS株式会社 / 川本工業株式会社 / 株式会社共栄社 / 株式会社KSP / 株式会社合同通信 / 株式会社ジェイコム湘南・神奈川 / 株式会社シグマコミュニケーションズ / 株式会社清光社 / 株式会社テレビ神奈川 / 東工株式会社 / 日成工事株式会社 / 日生商工株式会社 / 日総ブレイン株式会社 / 日本発条株式会社 / 株式会社野毛印刷社 / パナソニックEWエンジニアリング株式会社 / Piascore株式会社 / 平安堂薬局 / 株式会社ホテル、ニューグランド / 一般社団法人本牧関連産業振興協会 / 丸茂電機株式会社 / 三沢電機株式会社 / 森平舞台機構株式会社 / ヤマハサウンドシステム株式会社 / 株式会社有隣堂 / 株式会社豊商會 / 株式会社ユニコーン / 株式会社横浜アーティスト / 横浜信用金庫 / 弁護士法人横浜パートナー法律事務所 / 横浜ビルシステム株式会社 / 株式会社ワイヤーソリューションズ / 匿名 3社

永年個人賛助会員：延命政之 / 小山明枝

個人賛助会員：味田健一 / 小川 浩 / 黒瀬博靖 / 鈴木真由美 / 高岡俊之 / 高野伊久男 / 田中浩司 / 戸張 実 / 中澤守正 / 橋本尚子 / 松森 繁 / 山口健太郎 / 匿名 6名

【協賛・協力・寄付】

能舞台協賛：ナイス株式会社

個別協賛：アートコートギャラリー / 株式会社アートフロントギャラリー / アクセンチュア 芸術部/Accenture Art Salon / 味奈登庵 / 株式会社ルーク / 匿名 1社

協力：株式会社崎陽軒 / 日本化工機材株式会社 / 株式会社富士住建

一般寄付：匿名 3名

神奈川芸術プレス vol.165 発行：公益財団法人神奈川芸術文化財団 TEL：045-222-0551

2024年(令和6年)9月26日 発行

企画・制作：公益財団法人神奈川芸術文化財団、株式会社ボイズ

編集：及位友美・安部見空(voids) 企画協力：山崎健太

デザイン：岡部正裕(voids)＋三浦佑介(shubidua) イラストレーション：白尾可奈子 校正・校閲：聚珍社 印刷：深雪印刷

神奈川芸術プレス
WEB版はこちらから



【禁無断転載・複写】無料配布

※本誌掲載情報は2024年9月5日現在のもの